メイン講義

目次

古文
第１講　共通テスト本試験 第３問……p1
第２講　共通テスト追試験 第３問……p12
漢文
第３講　共通テスト本試験 第４問……p23
共通テスト追試験 第４問……p33

第１講　共通テスト本試験 第３問

第３問

次の【文章Ⅰ】は、鎌倉時代の歴史を描いた『増鏡』の一節、【文章Ⅱ】は、後（ご）深草（ふかくさ）院に親しく仕える二条という女性が書いた『とはずがたり』の一節である。どちらの文章も、後深草院（本文では「院」）が異母妹である前斎宮（さいぐう）（本文では「斎宮」）に恋慕する場面を描いたものであり、【文章Ⅰ】の内容は、【文章Ⅱ】の8行目以降を踏まえて書かれている。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問１～４）に答えよ。なお、設問の都合で本文の下に行数を付してある。（配点　50）

【文章Ⅰ】

院も我が御方にかへりて、うちやすませ給（たま）へれど、(ア)まどろまれ給はず。ありつる御面影、心にかかりておぼえ給ふぞいとわりなき。「さし(注1)はへて聞こえむも、人聞きよろしかるまじ。いかがはせむ」と思（おぼ）し乱る。御はらからといへど、年月よそにて生ひたち給へれば、うとうとしくならひ給へるままに、Aつつましき御思ひも薄くやありけむ、なほひたぶるにいぶせくてやみなむは、あかず口惜しと思す。けしからぬ御

メモ欄

本性（ほんじやう）なりや。

なにがし（注2）の大納言の女（むすめ）、御身近く召し使ふ人、かの斎宮（注3）にも、さるべきゆかりありて睦（むつ）ましく参りなるるを召し寄せて、

「なれなれしきまでは思ひ寄らず。ただ少しけ近き程にて、思ふ心の片端を聞こえむ。かく折よき事もいと難かるべし」

と B せちにまめだちてのたまへば、いかがたばかりけむ、夢うつつともなく近づき聞こえ給へれば、いと心憂しと思せど、あえかに消えまどひなどはし給はず。

【文章Ⅱ】

斎宮は二十に余り給ふ。（イ）ねびととのひたる御さま、神（注4）もなごりを慕ひ給ひけるもことわりに、花といはば、桜にたとへても、よそ目はいかがとあやまたれ、霞（注5）の袖を重ぬるひまもいかにせましと思ひぬべき御ありさまなれば、ましてくまなき御心（注6）の内は、いつしかいかなる御物思ひの種にかと、よそも御心苦しくぞおぼえさせ給ひし。

メモ欄

御物語ありて、神路（かみぢ）(注7)の山の御物語など、絶え絶え聞こえ給ひて、
「今宵はいたう更け侍（はべ）りぬ。のどかに、明日は嵐(注8)の山の禿（かぶろ）なる梢（こずゑ）ども御覧じて、御帰りあれ」
など申させ給ひて、我が御方へ入らせ給ひて、いつしか、
「いかがすべき、いかがすべき」
と仰せあり。思ひつることよと、をかしくてあれば、
「幼(注9)くより参りししるしに、このこと申しかなへたらむ、まめやかに心ざしありと思はむ」
など仰せありて、やがて御使（つかひ）に参る。ただ(ウ)おほかたなるやうに、「御対面うれしく。御旅寝すさまじくや」などにて、忍びつつ文あり。氷襲（こほりがさね）(注10)の薄様（うすやう）にや、
「知られじな今しも見つる面影のやがて心にかかりけりとは」
更けぬれば、御前なる人もみな寄り臥（ふ）したる。御主（ぬし）も小几帳（こぎちやう）(注11)引き寄せて、御殿籠（とのごも）りたるなりけり。近く参りて、事のやう奏すれば、御顔うち赤めて、いと物ものたま

メモ欄

はず、文も見るとしもなくて、うち置き給ひぬ。

「何とか申すべき」

と申せば、

「思ひ寄らぬ御言の葉は、何と申すべき方もなくて」

とばかりにて、また寝給ひぬるも心やましければ、帰り参りて、このよしを申す。

「ただ、寝たまふらむ所へ導け、導け」

と責めさせ給ふもむつかしければ、御供に参らむことはやすくこそ、しるべして参る。甘（かん）（注12）の御衣（ぞ）などはことごとしければ、御大口（おほくち）（注13）ばかりにて、忍びつつ入らせ給ふ。

まづ先に参りて、御障子をやをら開けたれば、ありつるままにて御殿籠りたる。御前なる人も寝入りぬるにや、音する人もなく、小（ちひ）（注14）さらかに這（は）ひ入らせ給ひぬる後、いかなる御事どもかありけむ。

（注）１　さしはへて ―― わざわざ。
２　なにがしの大納言の女 ―― 二条を指す。二条は**【文章Ⅱ】**の作者である。
３　斎宮 ―― 伊勢神宮に奉仕する未婚の皇族女性。天皇の即位ごとに選ばれる。

メモ欄

4　神もなごりを慕ひ給ひける ―― 斎宮を退きながらも、帰京せずにしばらく伊勢にとどまっていたことを指す。

5　霞の袖を重ぬる ―― 顔を袖で隠すことを指す。美しい桜の花を霞が隠す様子にたとえる。

6　くまなき御心 ―― 院の好色な心のこと。

7　神路の山の御物語 ―― 伊勢神宮に奉仕していた頃の思い出話を指す。

8　嵐の山の禿なる梢ども ―― 嵐山（あらしやま）の落葉した木々の梢。

9　幼くより参りし ―― 二条が幼いときから院の側近くにいたことを指す。

10　氷襲の薄様 ―― 「氷襲」は表裏の配色で、表も裏も白。「薄様」は紙の種類。

11　小几帳 ―― 小さい几帳のこと。

12　甘の御衣 ―― 上皇の平服として着用する直衣（のうし）。

13　大口 ―― 束帯のときに表袴の下にはく裾口の広い下袴。

14　小さらかに ―― 体を縮めて小さくして。

メモ欄

問１　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 3 。

(ア)　まどろまれ給はず　1
① 酔いが回らずにいらっしゃる
② お眠りになることができない
③ ぼんやりなさっている場合ではない
④ お心が安まらずにいらっしゃる
⑤ 一息つこうともなさらない

(イ)　ねびととのひたる　2
① 将来が楽しみな
② 成熟した
③ 着飾った
④ 場に調和した
⑤ 年相応の

(ウ)　おほかたなるやうに　3
① 特別な感じで
② 落ち着き払って
③ ありふれた挨拶で
④ 親切心を装って
⑤ 大人らしい態度で

問２　傍線部Ａ「つつましき御思ひも薄くやありけむ、なほひたぶるにいぶせくてやみなむは、あかず口惜しと思す」の語句や表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **4** 。

① 「つつましき御思ひ」は、兄である院と久しぶりに対面して、気恥ずかしく思っている斎宮の気持ちを表している。

② 「ありけむ」の「けむ」は過去推量の意味で、対面したときの斎宮の心中を院が想像していることを表している。

③ 「いぶせくて」は、院が斎宮への思いをとげることができずに、悶々（もんもん）とした気持ちを抱えていることを表している。

④ 「やみなむ」の「む」は意志の意味で、院が言い寄ってくるのをかわそうという斎宮の気持ちを表している。

⑤ 「あかず口惜し」は、不満で残念だという意味で、院が斎宮の態度を物足りなく思っていることを表している。

問３　傍線部Ｂ「せちにまめだちてのたまへば」とあるが、このときの院の言動についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **5** 。

① 二条と斎宮を親しくさせてでも、斎宮を手に入れようと企（たくら）んでいるところに、院の必死さが表れている。
② 恋心を手紙で伝えることをはばかる言葉に、斎宮の身分と立場を気遣う院の思慮深さが表れている。
③ 自分の気持ちを斎宮に伝えてほしいだけだという言葉に、斎宮に対する院の誠実さが表れている。
④ この機会を逃してはなるまいと、一気に事を進めようとしているところに、院の性急さが表れている。
⑤ 自分と親密な関係になることが斎宮の利益にもなるのだと力説するところに、院の傲慢さが表れている。

問４　次に示すのは、授業で**【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】**を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読み、後の(i)〜(iii)の問いに答えよ。

教　師　いま二つの文章を読みましたが、**【文章Ⅰ】**の内容は、**【文章Ⅱ】**の８行目以降に該当していました。**【文章Ⅰ】**は**【文章Ⅱ】**を資料にして書かれていますが、かなり違う点もあって、それぞれに特徴がありますね。どのような違いがあるか、みんなで考えてみましょう。

生徒Ａ　**【文章Ⅱ】**のほうが、**【文章Ⅰ】**より臨場感がある印象かなあ。

生徒Ｂ　確かに、院の様子なんかそうかも。**【文章Ⅱ】**では［　X　］。

生徒Ｃ　ほかに、二条のコメントが多いところも特徴的だよね。**【文章Ⅱ】**の［　Y　］。普段から院の側に仕えている人の目で見たことが書かれているっていう感じがあるよ。

生徒Ｂ　そう言われると、**【文章Ⅰ】**では**【文章Ⅱ】**の面白いところが全部消されてしまっている気がする。すっきりしてまとまっているけど物足りない。

教　師　確かにそう見えるかもしれませんが、**【文章Ⅰ】**がどのようにして書かれたものなのかも考える必要がありますね。**【文章Ⅰ】**は過去の人物や出来事などを後の時代の人が書いたものです。文学史では「歴史物語」と分類されていますね。**【文章Ⅱ】**のように当事者の視点から書いたものではないということに注意しましょう。

生徒Ｂ　そうか、書き手の意識の違いによってそれぞれの文章に違いが生じているわけだ。

生徒Ａ　そうすると、**【文章Ⅰ】**で［　Z　］、とまとめられるかな。

生徒Ｃ　なるほど、あえてそういうふうに書き換えたのか。

教　師　こうして丁寧に読み比べると、面白い発見につながりますね。

(i) 空欄 **X** に入る最も適当なものを、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① いてもたってもいられない院の様子が、発言中で同じ言葉を繰り返しているあたりからじかに伝わってくる
② 斎宮に対する恋心と葛藤が院の中で次第に深まっていく様子が、二条との会話からありありと伝わってくる
③ 斎宮に執着する院の心の内が、斎宮の気持ちを繰り返し思いやっているところからはっきりと伝わってくる
④ 斎宮から期待通りの返事をもらった院の心躍る様子が、院の具体的な服装描写から生き生きと伝わってくる

(ii) 空欄 **Y** に入る最も適当なものを、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 4行目「いつしかいかなる御物思ひの種にか」では、院の性格を知り尽くしている二条が、斎宮の容姿を見た院に、早くも好色の虫が起こり始めたであろうことを感づいている
② 10行目「思ひつることよと、をかしくてあれば」では、好色な院があの手この手で斎宮を口説こうとしているのに、世間離れした斎宮には全く通じていないことを面白がっている
③ 22行目「寝給ひぬるも心やましければ」では、院が強引な行動に出かねないことに対する注意を促すため、床についていた斎宮を起こしてしまったことに恐縮している
④ 24行目「責めさせ給ふもむつかしければ」では、逢瀬（おうせ）の手引きをすることに慣れているはずの二条でさえ、斎宮を院のもとに導く手立てが見つからずに困惑している

(iii) 空欄 Z に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① 院の斎宮への情熱的な様子を描きつつも、権威主義的で高圧的な一面を削っているのは、院を理想的な人物として印象づけて、朝廷の権威を保つように配慮しているからだろう

② 院と斎宮と二条の三者の関係性を明らかにすることで、複雑に絡み合った三人の恋心を整理しているのは、歴史的事実を知る人がわかりやすく描写しようとしているからだろう

③ 院が斎宮に送った、いつかは私になびくことになるという歌を省略したのは、神に仕えた相手との密通という事件性を弱めて、事実を抑制的に記述しようとしているからだろう

④ 院の発言を簡略化したり、二条の心情を省略したりする一方で、斎宮の心情に触れているのは、当事者全員を俯瞰（ふかん）する立場から出来事の経緯を叙述しようとしているからだろう

第２講　共通テスト追試験　第３問

第３問

次の文章は、『蜻蛉（かげろう）日記』の一節である。療養先の山寺で母が死去し、作者はひどく嘆き悲しんだ。以下は、その後の場面から始まる。これを読んで、後の問い（問１～５）に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に 1 ～ 6 の番号を付してある。（配点　50）

1 かくて、とかうものすること（注1）など、いたつく（注2）人多くて、（ア）<u>みなしはてつ</u>。いまはいとあはれなる山寺に集ひて、つれづれとあり。夜、目もあはぬままに、嘆き明かしつつ、山づらを見れば、霧はげに麓（ふもと）をこめたり。京もげに誰（た）がもとへかは出（い）でむとすらむ、いで、なほここながら死なむと思へど、生くる（注3）人ぞいとつらきや。

2 かくて十余日になりぬ。僧ども念仏のひまに物語するを聞けば、「この亡くなりぬる人の、あらはに見ゆるところなむある。さて、近く寄れば、消え失せぬなり。遠うては見ゆなり」「いづれの国とかや」「みみらくの島となむいふなる」など、口々

メモ欄

語るを聞くに、いと知らまほしう、悲しうおぼえて、かくぞいはるる。

ありとだによそにても見む名にし負はばわれに聞かせよみみらくの島

といふを、兄人(せうと)なる人聞きて、それも泣く泣く、

いづことか音にのみ聞くみみらくの島がくれにし人をたづねむ

3 かくてあるほどに、立ち(注4)ながらものして、日々にとふめれど、ただいまは何心もなきに、穢(けが)らひの心もとなきこと、おぼつかなきことなど、むつかしきまで書きつづけてあれど、ものおぼえざりしほどのことなればにや、おぼえず。

4 里にも急がねど、心にしまかせねば、今日、みな出で立つ日になりぬ。来し時は、膝に臥(ふ)し給(たま)へりし人を、いかでか安らかにと思ひつつ、わが身は汗になりつつ、さりともと思ふ心そひて、頼もしかりき。此度(こたみ)は、いと安らかにて、あさましきまでくつろかに乗られたるにも、道すがらいみじう悲し。

5 降りて見るにも、(イ)<u>さらにものおぼえず</u>悲し。もろともに出で居つつ、つくろはせし草なども、わづらひしよりはじめて、うち捨てたりければ、生ひこりていろい

メモ欄

ろに咲き乱れたり。(注5)わざとのことなども、みなおのがとりどりすれば、我はただつれづれとながめをのみして、「ひとむらすすき虫の音(ね)の」とのみぞいはるる。

　手ふれねど花はさかりになりにけりとどめおきける露にかかりて

などぞおぼゆる。

6 (注6)これかれぞ殿上などもせねば、穢らひもひとつにしなしためれば、おのがじし(注7)ひき局(つぼね)などしつつあめる中に、我のみぞ紛るることなくて、夜は念仏の声聞きはじむるより、やがて泣きのみ明かさる。(注8)四十九日(しじふくにち)のこと、誰(たれ)も欠くことなくて、家にてぞする。(注9)わが知る人、おほかたのことを行ひためれば、人々多くさしあひたり。わが心ざしをば、仏をぞ描(か)かせたる。その日過ぎぬれば、みなおのがじし行きあかれぬ。ましてわが心地は心細うなりまさりて、いとどやるかたなく、(注10)人はかう心細げなるを思ひて、ありしよりはしげう通ふ。

（注）1　とかうものすることなど ── 葬式やその後始末など。
2　いたつく ── 世話をする。
3　生くる人 ── 作者を死なせないようにしている人。

メモ欄

4　立ちながらものして ―― 作者の夫である藤原兼家が、立ったまま面会しようとしたということ。立ったままであれば、死の穢（けが）れに触れないと考えられていた。

5　わざとのこと ―― 特別に行う供養。

6　これかれぞ殿上などもせねば、穢らひもひとつにしなしためれば ―― 殿上人もいないので、皆が同じ場所に籠もって喪に服したことを指す。殿上で働く人には、服喪に関わる謹慎期間をめぐってさまざまな制約があった。

7　ひき局 ―― 屏風（びょうぶ）などで仕切りをして一時的に作る個人スペース。

8　四十九日のこと ―― 人の死後四十九日目に行う、死者を供養するための大きな法事。

9　わが知る人 ―― 作者の夫、兼家。

10　人 ―― 兼家。

メモ欄

問１　傍線部(ア)・(イ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［１］・［２］。

(ア)　みなしはてつ　［１］
① 皆が疲れ果てた
② すべて済ませた
③ 一通り体裁を整えた
④ 見届け終わった
⑤ 悲しみつくした

(イ)　さらにものおぼえず　［２］
① 少しもたとえようがないくらい
② これ以上は考えられないくらい
③ 再び思い出したくないくらい
④ もはや何も感じないくらい
⑤ 全く何もわからないくらい

問２ [2] 段落、[3] 段落の内容に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから**二つ**選べ。ただし、解答の順序は問わない。

解答番号は [3]・[4]。

① 僧たちが念仏の合間に雑談しているのを聞いて、その不真面目な態度に作者は悲しくなった。

② 作者は「みみらくの島」のことを聞いても半信半疑で、知っているなら詳しく教えてほしいと兄に頼んだ。

③ 「みみらくの島」のことを聞いた作者の兄は、その島の場所がわかるなら母を訪ねて行きたいと詠んだ。

④ 作者は、今は心の余裕もなく死の穢れのこともあるため、兼家にいつ会えるかはっきりしないと伝えた。

⑤ 兼家は、母を亡くした作者に対して、はじめは気遣っていたが、だんだんといい加減な態度になっていった。

⑥ 作者は、母を亡くして呆然（ぼうぜん）とする余り、兼家から手紙を受け取っても、かえってわずらわしく思った。

問3 4 段落に記された作者の心中についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 5 。

① 自宅には帰りたくないと思っていたので、人々に連れられて山寺を去ることを不本意に思っていた。
② 山寺に向かったときの車の中では、母の不安をなんとか和らげようと、母の気を紛らすことに必死だった。
③ 山寺へ向かう途中、母の死を予感して冷や汗をかいていたが、それを母に悟られないように注意していた。
④ 山寺に到着するときまでは、祈禱(きとう)を受ければ母は必ず回復するに違いないと、僧たちを心強く思っていた。
⑤ 帰りの車の中では、介抱する苦労がなくなったために、かえって母がいないことを強く感じてしまった。

問４　5　段落の二重傍線部「ひとむらすすき虫の音の」は、『古今和歌集』の、ある和歌の一部を引用した表現である。その和歌と詞書（ことばがき）（和歌の前書き）は、次の【資料】の通りである。これを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【資料】

藤原利基朝臣（としもとのあそん）(注1)の右近中将にて住み侍（はべ）りける曹司（ざうし）(注2)の、身まかりてのち、人も住まずなりにけるに、秋の夜ふけてものよりまうで来けるついでに見入れければ、もとありし前栽もいと繁く荒れたりけるを見て、はやくそこに侍りければ、昔を思ひやりてよみける

御春有助（みはるのありすけ）(注3)

君が植ゑしひとむらすすき虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな

（注）１　藤原利基朝臣――平安時代前期の貴族。
２　曹司――邸宅の一画にある、貴人の子弟が住む部屋。
３　御春有助――平安時代前期の歌人。

（ｉ）【資料】の詞書の語句や表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 「人も住まずなりにける」の「なり」は伝聞を表し、誰も住まないと聞いたという意味である。
② 「見入れければ」は思わず見とれてしまったところという意味である。
③ 「前栽」は庭を囲むように造った垣根のことである。
④ 「はやく」は時の経過に対する驚きを表している。
⑤ 「そこに侍りければ」は有助が利基に仕えていたことを示す。

(ii) 【資料】および 5 段落についての説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 5 段落の二重傍線部は、親しかった人が残した植物の変化を描く【資料】と共通しているために思い起こされたものだが、【資料】では利基の死後は誰も住まなくなった曹司の庭の様子が詠まれているのに対して、5 段落では母が亡くなる直前まで手入れをしていたおかげで色とりどりに花が咲いている様子が表現されている。

② 5 段落の二重傍線部は、親しかった人が残した植物の変化を描く【資料】と共通しているために思い起こされたものだが、【資料】では荒れ果てた庭のさびしさが「虫の音」によって強調されているのに対して、5 段落では自由に咲き乱れている草花のたくましさが「手ふれねど」によって強調されている。

③ 5 段落の二重傍線部は、親しかった人が残した庭の様子を描く【資料】と共通しているために思い起こされたものだが、【資料】では虫の美しい鳴き声を利基に聴かせたいという思いが詠まれているのに対して、5 段落では母の形見として咲いている花をいつまでも残しておきたいという願望が詠まれている。

④ 5 段落の二重傍線部は、手入れする人のいなくなった庭の様子を描く【資料】と共通しているために思い起こされたものだが、【資料】では野原のように荒れた庭を前にしたもの悲しさが詠まれているのに対して、5 段落では悲しみの中にも亡き母が生前に注いだ愛情のおかげで花が咲きほこっていることへの感慨が表現されている。

⑤ 5 段落の二重傍線部は、手入れする人のいなくなった庭の様子を描く【資料】と共通しているために思い起こされたものだが、【資料】では利基が植えた草花がすっかり枯れてすすきだけになったことへの落胆が詠まれているのに対して、5 段落では母の世話がないにもかかわらずまだ花が庭に咲き残っていることへの安堵（あんど）が表現されている。

問５　[６]段落では、作者の孤独が描かれているが、その表現についての説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。
解答番号は[８]。

① 推定・婉曲を表す「めり」が繰り返し用いられることで、周囲の人々の様子をどこか距離を置いて見ている作者のあり方が表現されている。

② 「おのがじし」の描写の後に、「我」「わが」と繰り返し作者の状況が対比されることで、作者の理解されない悲しみが表現されている。

③ 「仏をぞ描かせたる」には、心を閉ざした作者を慰めるために兼家が仏の姿を描いてくれたことへの感謝の気持ちが、係り結びを用いて強調されている。

④ 「いとどやるかたなく」からは、母を失った悲しみのほかに、親族が法要後に去って心細さまで加わった、作者の晴れない気持ちが読み取れる。

⑤ 「人はかう心細げなるを思ひて」からは、悲しみに暮れる作者に寄り添ってくれる存在として、作者が兼家を認識していることがうかがわれる。

第３講　共通テスト本試験 第４問

第４問

清の学者・政治家阮元（げんげん）は、都にいたとき屋敷を借りて住んでいた。その屋敷には小さいながらも花木の生い茂る庭園があり、門外の喧噪（けんそう）から隔てられた別天地となっていた。以下は、阮元がこの庭園での出来事について、嘉慶（かけい）十八年（一八一三）に詠じた【詩】とその【序文】である。これを読んで、後の問い（問１～７）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名・本文を省いたところがある。（配点　50）

【序文】

余旧蔵董(注1)思翁自書詩扇、有「名園」「蝶夢」之句。辛(注2)未秋、有異蝶来園中。I 識者知為太常仙蝶、呼之落扇。継而復(ア)見之於瓜(注3)爾佳氏園中。A 客有呼之入匣奉帰余園者、及至園

メモ欄

啓之、則空匣（注4）也。壬申（注5）春、蝶復見於余園台上。画者祝曰、B「苟近我、我当図之。」蝶落其袖、審（イ）視良久、得（ウ）其形色、乃従容（注6）鼓翅而去。園故無名也。於是始以思翁詩及蝶意名之。秋半、余奉使出都、是園又属他人。回憶芳叢、真如夢矣。

【詩】

春城花事（注7）小園多　幾度看花幾度 X

花為我開留我住　人随春去C奈春何

メモ欄

思翁夢ハ好クシテ遺シ二書扇一ヲ　‖Ⅱ　仙蝶図成リテ染ム二袖羅一ヲ

他日誰(た)ガ家カ還(ま)タ種(う)エレ竹ヲ　坐シテレ(注8)輿(こし)ニ可キレ許(ゆる)スレ二子猷(いう)ノ過(よぎ)ルヲ一

（阮元『揅経室集(けんけいしつしゅう)』による）

（注）
1　董思翁――明代の文人・董其昌(とうきしょう)（一五五五―一六三六）のこと。
2　辛未――清・嘉慶十六年（一八一一）。
3　瓜爾佳――満州族名家の姓。
4　空匣――空の箱。
5　壬申――清・嘉慶十七年（一八一二）。
6　従容――ゆったりと。
7　花事――春に花をめでたり、見て歩いたりすること。
8　坐レ輿可レ許二子猷過一――子猷は東晋・王徽之(おうきし)の字(あざな)。竹好きの子猷は通りかかった家に良い竹があるのを見つけ、感嘆して朗詠し、輿(こし)に乗ったまま帰ろうとした。その家の主人は王子猷が立ち寄るのを待っていたので、引き留めて歓待し、意気投合したという故事を踏まえる。

メモ欄

問１　波線部(ア)「復」・(イ)「審」・(ウ)「得」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［1］〜［3］。

(ア)　「復」［1］
① なお
② ふと
③ じっと
④ ふたたび
⑤ まだ

(イ)　「審」［2］
① 正しく
② 詳しく
③ 急いで
④ 謹んで
⑤ 静かに

(ウ)　「得」［3］
① 気がつく
② 手にする
③ 映しだす
④ 把握する
⑤ 捕獲する

問２　傍線部Ａ「客有呼之入匣奉帰余園者」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［４］。

① 客 有㆔ 呼㆑ 之 入㆓ 匣 奉㆒ 帰㆓ 余 園㆒ 者　　客に之を呼び匣（はこ）に奉じ入るること有りて余の園に帰る者あり

② 客 有㆓ 呼㆑ 之 入㆑ 匣 奉 帰 余 園 者㆒　　客に之を呼び匣に入れ奉じて帰さんとする余の園の者有り

③ 客 有㆘ 呼㆓ 之 入㆒㆑ 匣 奉 帰㆓ 余 園㆒ 者㆖　　客に之を匣に入れ呼び奉じて余の園に帰る者有り

④ 客 有㆘ 呼㆑ 之 入㆑ 匣 奉 帰㆓ 余 園㆒ 者㆖　　客に之を呼びて匣に入れ奉じて余の園に帰さんとする者有り

⑤ 客 有㆑ 呼㆑ 之 入㆑ 匣 奉㆑ 帰㆓ 余 園 者㆒　　客に之を呼ぶこと有りて匣に入れ余の園の者に帰すを奉ず

問３　傍線部**Ｂ**「苟近レ我、我当レ図レ之」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［５］。

① どうか私に近づいてきて、私がおまえの絵を描けるようにしてほしい。
② ようやく私に近づいてきたのだから、私はおまえの絵を描くべきだろう。
③ ようやく私に近づいてきたのだが、どうしておまえを絵に描けるだろうか。
④ もし私に近づいてくれたとしても、どうしておまえを絵に描けただろうか。
⑤ もしも私に近づいてくれたならば、必ずおまえを絵に描いてやろう。

問４　空欄 X に入る漢字と【詩】に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 「座」が入り、起承転結で構成された七言絶句。
② 「舞」が入り、形式の制約が少ない七言古詩。
③ 「歌」が入り、頷聯（がんれん）と頸聯（けいれん）がそれぞれ対句になった七言律詩。
④ 「少」が入り、第一句の「多」字と対になる七言絶句。
⑤ 「香」が入り、第一句末と偶数句末に押韻する七言律詩。

問５　傍線部Ｃ「奈レ 春 何」の読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① はるもいかん
② はるにいづれぞ
③ はるにいくばくぞ
④ はるをなんぞせん
⑤ はるをいかんせん

問６　【詩】と【序文】に描かれた一連の出来事のなかで、二重傍線部Ⅰ「太常仙蝶」・Ⅱ「仙蝶」が現れたり、とまったりした場所はどこか。それらのうちの三箇所を、現れたりとまったりした順に挙げたものとして、最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① 春の城(まち) ―― 袖 ―― 瓜爾佳氏の庭園
② 春の城(まち) ―― 阮元の庭園の台 ―― 画家の家
③ 董思翁の家 ―― 扇 ―― 画家の家
④ 瓜爾佳氏の庭園 ―― 扇 ―― 袖
⑤ 扇 ―― 阮元の庭園の台 ―― 袖

問７　**【詩】**と**【序文】**から読み取れる筆者の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **9** 。

① 毎年花が散り季節が過ぎゆくことにはかなさを感じ、董思翁の家や瓜爾佳氏の園に現れた美しい蝶が扇や絵とともに他人のものとなったことをむなしく思っている。

② 扇から抜け出し庭園に現れた不思議な蝶の美しさに感動し、いずれは箱のなかにとらえて絵に描きたいと考えていたが、それもかなわぬ夢となってしまったことを残念に思っている。

③ 春の庭園の美しさを詩にできたことに満足するとともに、董思翁の夢を扇に描き、珍しい蝶の模様をあしらった服ができあがったことを喜んでいる。

④ 不思議な蝶のいる夢のように美しい庭園に住んでいたが、都を離れているあいだに人に奪われてしまい、厳しい現実と美しい夢のような世界との違いを嘆いている。

⑤ 時として庭園に現れる珍しい蝶は、捕まえようとしても捕まえられない不思議な蝶であったが、その蝶が現れた庭園で過ごしたことを懐かしく思い出している。

第３講　共通テスト追試験　第４問

第４問

唐の王宮の中に雉(きじ)が集まってくるという事件が何度も続き、皇帝である太宗(たいそう)は何かの前触れではないかと怪しんで、臣下に意見を求めた。以下は、この時に臣下の褚遂良(ちょすいりょう)が出した意見と太宗の反応とに対する批評である。これを読んで、後の問い（問１〜６）に答えよ。なお、設問の都合で本文を改め、返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点　50）

遂良曰ハク、「昔秦ノ(注1)文公ノ時、童子化シテ為ル(レ)雉(きじ)ト。雌ハ鳴キ(二)陳(注2)倉ニ(一)、雄ハ鳴ク(二)南(注3)陽ニ(一)。童子曰ハク、『得ル(レ)雄ヲ者ハ王タリ、得ル(レ)雌ヲ者ハ覇タリト。』文公遂ニ雄(ゆう)タリ(二)諸侯ニ(一)。陛(注4)下ハ本(もと)封ゼラル(レ)秦ニ、故ニ雄雌並ビニ見(あら)ハレ、以テ告グ(二)明徳ヲ(一)。」上(しやう)(注5)説(よろこ)ビテ曰ハク、「<u>人［X］以無学</u>(A)、遂良ハ所

メモ欄

謂多識君子哉。」

予以謂、秦雉、陳宝（注6）也、B豈常雉乎。

今見雉、即（ア）為之宝、猶（注7）得白魚、便自

比武王。此諂（注8）妄之甚、愚瞽（注9）其君、而

太宗善（イ）之、史（注10）不譏焉。C野鳥無故数

入宮、此乃災異。D使魏徴（注11）在、必以高（注12）

宗鼎耳之祥諫也。遂良非不知此、

捨鼎雉而取陳宝、E非忠臣也。

（蘇軾『重編東坡先生外集』による）

（注）1　秦文公 —— 春秋時代の諸侯の一人で、秦の統治者。

2　陳倉 —— 地名。現在の陝西省にあった。

3　南陽 —— 地名。現在の河南省と湖北省の境界あたりにあった。

メモ欄

4　陛下本封㆑秦 ―― 太宗は即位以前、秦王の位を与えられていた。唐の長安も春秋時代の秦の領地に含まれる。

5　上 ―― 太宗。

6　陳宝 ―― 童子が変身した雉を指す。

7　猶㆘得㆓白魚㆒、便自比㆗武王㆖ ―― 周の武王が船で川を渡っていると、白い魚が船中に飛び込んできた故事を踏まえる。その後、武王は殷(いん)を滅ぼして周王朝を開き、白魚は吉兆とされた。

8　諂妄 ―― こびへつらうこと。

9　愚瞽 ―― 判断を誤らせる。

10　史 ―― 史官。歴史書編集を担当する役人。

11　魏徴 ―― 太宗の臣下。

12　高宗鼎耳之祥 ―― 殷の高宗の祭りの時、鼎(かなえ)（三本足の器）の取っ手に雉がとまって鳴き、これを異変と考えた臣下が王をいさめた故事。後に見える「鼎雊」もこれと同じ。「雊」は雉が鳴くこと。

メモ欄

問１　波線部(ア)「即」・(イ)「善」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［1］・［2］。

(ア)「即」［1］
① かえって
② そこではじめて
③ すぐに
④ そのときには
⑤ かりに

(イ)「善」［2］
① 崇拝する
② 称賛する
③ 整える
④ 得意とする
⑤ 親友になる

問２　傍線部Ａ「人 X 以 無 学」について、空欄 X に入る語と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 3 。

① 須　　人須らく以て学無かるべし
② 不如　人以て学無きに如かず
③ 不可　人以て学無かるべからず
④ 猶　　人猶ほ以て学無きがごとし
⑤ 不唯　人唯だ以て学無きのみにあらず

問3　傍線部Ｂ「豈 常 雉 乎」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 4 。

① きっといつもの雉だろう
② どうして普通の雉であろうか
③ おそらくいつも雉がいるのだろう
④ なんともありふれた雉ではないか
⑤ なぜ普通の雉なのだろう

問４　傍線部Ｃ「野 鳥 無 故 数 入 宮」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **5** 。

① 野 鳥 無レ 故レ 数レ 入レ 宮　　野鳥宮に入るを数ふるに故(ゆゑ)無し

② 野 鳥 無二 故 数一 入レ 宮　　野鳥故(ことさら)に数ふる無く宮に入る

③ 野 鳥 無レ 故 数 入レ 宮　　野鳥故(ゆゑ)無くして数(しばしば)宮に入る

④ 野 鳥 無 故 数 入レ 宮　　野鳥無きは故(もと)より数(しばしば)宮に入ればなり

⑤ 野 鳥 無二 故 数 入一レ 宮　　野鳥故(ことさら)に数(しばしば)宮に入ること無し

問5　傍線部D「使㆓魏徴在㆒、必以㆓高宗鼎耳之祥㆒諫也」とあるが、次の【**資料**】は、魏徴が世を去ったときに太宗が彼を悼んで述べた言葉である。これを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【**資料**】

夫レ以テ㆑銅ヲ為セバ㆑鏡ト、可ク㆔以テ正ス㆓衣冠ヲ㆒、以テ㆑古ヲ為セバ㆑鏡ト、可ク㆔以テ知ル㆓興(注1)替ヲ㆒、以テ㆑人ヲ為セバ㆑鏡ト、可シ㆔以テ明ラカニス㆓得失ヲ㆒。朕常ニ保チ㆓此ノ三ノ鏡ヲ㆒、以テ防グ㆓己ノ過チヲ㆒。今魏徴殂(そ)(注2)逝(せいシ)、遂ニ亡(うしな)フ㆓一ノ鏡ヲ㆒矣。

（『旧唐書(くとうじょ)』による）

（注）1　興替――盛衰。

2　殂逝――亡くなる。

(i)　波線部「得　失」のここでの意味として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は　6　。

①　人の長所と短所
②　自国と他国の優劣
③　臣下たちの人望の有無
④　過去の王朝の成功と失敗
⑤　衣装選びの当否

(ii)　【資料】から、傍線部Ｄ「使㆓魏徴在㆒、必以㆓高宗鼎耳之祥㆒諫也」と述べられた背景をうかがうことができる。この【資料】を踏まえた傍線部Ｄの解釈として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は　7　。

①　鏡が物を客観的に映しだすように、魏徴は太宗に決してうそをつかなかったから、彼なら「高宗鼎耳」の故事を引用し、事件を誤解している太宗に真実を話しただろう。
②　鏡で身なりを点検するときのように、魏徴は太宗の言動に目を光らせていたから、彼なら「高宗鼎耳」の故事を引用し、事件にかこつけて太宗の無知をたしなめただろう。
③　鏡に映った自分自身であるかのように、魏徴は太宗のことを誰よりも深く理解していたから、彼なら「高宗鼎耳」の故事を引用し、事件で悩む太宗に同情して慰めただろう。
④　鏡が物のありのままの姿を映すように、魏徴は太宗に遠慮せず率直に意見するから、彼なら「高宗鼎耳」の故事を引用し、事件を機に太宗に反省するよう促しただろう。
⑤　鏡が自分を見つめ直す助けとなるように、魏徴は歴史の知識で太宗を助けてきたから、彼なら「高宗鼎耳」の故事を引用し、事件にとまどう太宗に知恵を授けただろう。

問6　傍線部**E**「非二忠臣一也」とあるが、そのように言われる理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **8** 。

① 褚遂良は、事件をめでたい知らせだと解釈して太宗の機嫌を取ったが、忠臣ならば、たとえ主君が不機嫌になるとしても、厳しく忠告して主君をより良い方向へと導くべきだったから。

② 褚遂良は、事件から貴重な教訓を引き出して太宗の気を引き締めたが、忠臣ならば、たとえ主君が緊張を解いてしまうとしても、主君の良い点をほめて主君に自信を持たせるべきだったから。

③ 褚遂良は、事件は過去にも例があり珍しくないと説明して太宗を安心させたが、忠臣ならば、たとえ主君が不安を感じるとしても、事件の重大さを強調して主君に警戒させるべきだったから。

④ 褚遂良は、事件と似た逸話を知っていたおかげで太宗を感心させたが、忠臣ならば、たとえ主君から聞かれていないとしても、普段から勉強して主君の求めに備えておくべきだったから。

⑤ 褚遂良は、事件の実態を隠し間違った報告をして太宗の注意をそらしたが、忠臣ならば、たとえ主君から怒られるとしても、本当のことを伝えて主君に事実を教えるべきだったから。

■ 共通テスト本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第３問（50）	1	1	2	5
		2	2	5
		3	3	5
	2	4	3	7
	3	5	4	7
	4	6	1	7
		7	1	7
		8	4	7

■ 共通テスト追試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第３問（50）	1	1	2	5
		2	5	5
	2	3 ー 4	3 ー 6	12（各6）
	3	5	5	7
	4	6	5	6
		7	4	8
	5	8	3	7

（注）
ー（ハイフン）でつながれた正解は，順序を問わない。

■ 共通テスト本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第４問（50）	1	1	4	4
		2	2	4
		3	4	4
	2	4	4	7
	3	5	5	7
	4	6	3	5
	5	7	5	5
	6	8	5	6
	7	9	5	8

■ 共通テスト追試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第４問（50）	1	1	3	4
		2	2	4
	2	3	3	7
	3	4	2	7
	4	5	3	7
	5	6	1	5
		7	4	8
	6	8	1	8

補講

目次

古文
第１講　共通テスト第１日程 第３問……p1
第２講　共通テスト第２日程 第３問……p10
漢文
第３講　共通テスト第１日程 第４問……p19
共通テスト第２日程 第４問……p29

第１講　共通テスト第１日程 第３問

第３問

次の文章は、『栄花物語』の一節である。藤原長家（本文では「中納言殿」）の妻が亡くなり、親族らが亡骸（なきがら）をゆかりの寺（法住寺（ほうじゅうじ））に移す場面から始まっている。これを読んで、後の問い（**問１～５**）に答えよ。（配点　50）

大北の方も、この(注1)殿ばらも、またおしかへし臥（ふ）しまろばせたまふ。これをだに悲しくゆゆしきことにいはでは、また何ごとをかはと見えたり。さて(注2)御車の後（しり）に、(注3)大納言殿、中納言殿、さるべき人々は歩ませたまふ。いへばおろかにて、(ア)<u>えまねびやらず</u>。(注4)北の方の御車や、女房たちの車などひき続けたり。御供の人々など数知らず多かり。法住寺には、常の御渡りにも似ぬ御車などのさまに、(注5)僧都（そうづ）の君、御目もくれて、え見たてまつりたまはず。さて御車かきおろして、つぎて人々おりぬ。

さてこの御忌（いみ）のほどは、誰（たれ）もそこにおはしますべきなりけり。山の方をながめやらせたまふにつけても、わざとならず色々にすこしうつろひたり。鹿の鳴く音（ね）に御目も

メモ欄

さめて、今すこし心細さまさりたまふ。宮々(注6)よりも思(おぼ)し慰むべき御消息(せうそこ)たびたびあれど、ただ今はただ夢を見たらんやうにのみ思されて過ぐしたまふ。月のいみじう明(あか)きにも、思し残させたまふことなし。内裏(うち)わたりの女房も、さまざま御消息聞こゆれども、よろしきほどは、A「今みづから」とばかり書かせたまふ。進内侍(じんのないし)と聞こゆる人、聞こえたり。

　　契りけん千代は涙の水底(みなそこ)に枕ばかりや浮きて見ゆらん

中納言殿の御返し、

　　起き臥しの契りはたえて尽きせねば枕を浮くる涙なりけり

また東宮の若宮の御乳母(めのと)の小弁(こべん)、

X　悲しさをかつは思ひも慰めよ誰もつひにはとまるべき世か

御返し、

Y　慰むる方しなければ世の中の常なきことも知られざりけり

かやうに思しのたまはせても、いでや、もののおぼゆるにこそあめれ、まして月ごろ、

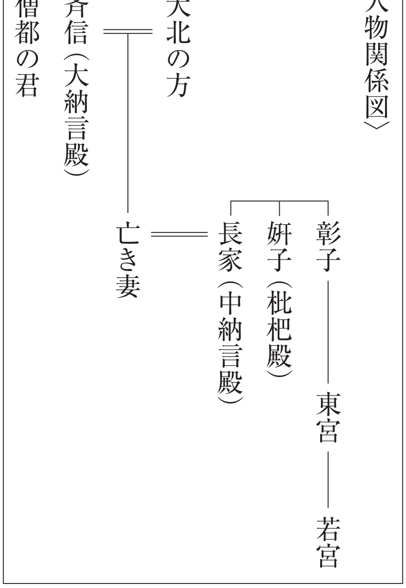
メモ欄

年ごろにもならば、思ひ忘るるやうもやあらんと、われながら心憂く思さる。何ごとにもいかでかくと(イ)めやすくおはせしものを、顔かたちよりはじめ、心ざま、手うち書き、絵などの心に入り、さいつころまで御心に入りて、うつ伏しうつ伏して描(か)きたまひしものを、この夏の絵を、枇杷殿(びはどの)にもてまゐりたりしかば、いみじう興じめでさせたまひて、納めたまひし、Bよくぞもてまゐりにけるなど、思し残すことなきままに、よろづにつけて恋しくのみ思ひ出できこえさせたまふ。年ごろ書き集(つ)めさせたまひける絵物語など、(注7)みな焼けにし後(のち)、去年(こぞ)、今年のほどにし集めさせたまへるもいみじう多かりし、(ウ)里に出でなば、とり出でつつ見て慰めむと思されけり。

（注）
1　この殿ばら ―― 故人と縁故のあった人々。
2　御車 ―― 亡骸を運ぶ車。
3　大納言殿 ―― 藤原斉信。長家の妻の父。
4　北の方 ――「大北の方」と同一人物。
5　僧都の君 ―― 斉信の弟で、法住寺の僧。
6　宮々 ―― 長家の姉たち。彰子や妍子（枇杷殿）ら。
7　みな焼けにし後 ―― 数年前の火事ですべて燃えてしまった後。

メモ欄

〈人物関係図〉



メモ欄

問１　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 3 。

(ア) えまねびやらず 1

① 信じてあげることができない
② かつて経験したことがない
③ とても真似（まね）のしようがない
④ 表現しつくすことはできない
⑤ 決して忘れることはできない

(イ) めやすくおはせしものを 2

① すばらしい人柄だったのになあ
② すこやかに過ごしていらしたのになあ
③ 感じのよい人でいらっしゃったのになあ
④ 見た目のすぐれた人であったのになあ
⑤ 上手におできになったのになあ

(ウ) 里に出でなば 3

① 自邸に戻ったときには
② 旧都に引っ越した日には
③ 山里に隠棲（いんせい）するつもりなので
④ 妻の実家から立ち去るので
⑤ 故郷に帰るとすぐに

問２　傍線部Ａ「『今みづから』とばかり書かせたまふ」とあるが、長家がそのような対応をしたのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **4** 。

① 並一通りの関わりしかない人からのおくやみの手紙に対してまで、丁寧な返事をする心の余裕がなかったから。
② 妻と仲のよかった女房たちには、この悲しみが自然と薄れるまでは返事を待ってほしいと伝えたかったから。
③ 心のこもったおくやみの手紙に対しては、表現を十分練って返事をする必要があり、少し待ってほしかったから。
④ 見舞客の対応で忙しかったが、いくらか時間ができた時には、ほんの一言ならば返事を書くことができたから。
⑤ 大切な相手からのおくやみの手紙に対しては、すぐに自らお礼の挨拶にうかがわなければならないと考えたから。

問３　傍線部Ｂ「よくぞもてまゐりにけるなど、思し残すことなきままに、よろづにつけて恋しくのみ思ひ出できこえさせたまふ」の語句や表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 5 。

① 「よくぞ……ける」は、妻の描いた絵を枇杷殿へ献上していたことを振り返って、そうしておいてよかったと、長家がしみじみと感じていることを表している。

② 「思し残すことなき」は、妻とともに過ごした日々に後悔はないという長家の気持ちを表している。

③ 「ままに」は「それでもやはり」という意味で、長家が妻の死を受け入れたつもりでも、なお悲しみを払拭することができずに苦悩していることを表している。

④ 「よろづにつけて」は、妻の描いた絵物語のすべてが焼失してしまったことに対する長家の悲しみを強調している。

⑤ 「思ひ出できこえさせたまふ」の「させ」は使役の意味で、ともに亡き妻のことを懐かしんでほしいと、長家が枇杷殿に強く訴えていることを表している。

問４　この文章の登場人物についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **6** 。

① 親族たちが悲しみのあまりに取り乱している中で、「大北の方」だけは冷静さを保って人々に指示を与えていた。

② 「僧都の君」は涙があふれて長家の妻の亡骸を直視できないほどであったが、気丈に振る舞い亡骸を車から降ろした。

③ 長家は秋の終わりの寂しい風景を目にするたびに、妻を亡くしたことが夢であってくれればよいと思っていた。

④ 「進内侍」は長家の妻が亡くなったことを深く悲しみ、自分も枕が浮くほど涙を流していると嘆く歌を贈った。

⑤ 長家の亡き妻は容貌もすばらしく、字が上手なことに加え、絵にもたいそう関心が深く生前は熱心に描いていた。

問５　次に示す**【文章】**を読み、その内容を踏まえて、Ｘ・Ｙ・Ｚの三首の和歌についての説明として適当なものを、後の①〜⑥のうちから**二つ**選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は［７］・［８］。

【文章】

『栄花物語』の和歌Ｘと同じ歌は、『千載和歌集』にも記されている。妻を失って悲しむ長家のもとへ届けられたという状況も同一である。しかし、『千載和歌集』では、それに対する長家の返歌は、

Ｚ　誰もみなとまるべきにはあらねども後(おく)るるほどはなほぞ悲しき

となっており、同じ和歌Ｘに対する返歌の表現や内容が、『千載和歌集』の和歌Ｚと『栄花物語』の和歌Ｙとでは異なる。『栄花物語』では、和歌Ｘ・Ｙのやりとりを経て、長家が内省を深めてゆく様子が描かれている。

①　和歌Ｘは、妻を失った長家の悲しみを深くは理解していない、ありきたりなおくやみの歌であり、「悲しみをきっぱり忘れなさい」と安易に言ってしまっている部分に、その誠意のなさが露呈してしまっている。

②　和歌Ｘは、世の中は無常で誰しも永遠に生きることはできないということを詠んでいるのに対して、和歌Ｚはその内容をあえて肯定することで、妻に先立たれてしまった悲しみをなんとか慰めようとしている。

③　和歌Ｘが、誰でもいつかは必ず死ぬ身なのだからと言って長家を慰めようとしているのに対して、和歌Ｚはひとまずそれに同意を示したうえで、それでも妻を亡くした今は悲しくてならないと訴えている。

④　和歌Ｚが、「誰も」「とまるべき」「悲し」など和歌Ｘと同じ言葉を用いることで、悲しみを癒(い)やしてくれたことへの感謝を表現しているのに対して、和歌Ｙはそれらを用いないことで、和歌Ｘの励ましを拒む姿勢を表明している。

⑤　和歌Ｙは、長家を励まそうとした和歌Ｘに対して私の心を癒やすことのできる人などいないと反発した歌であり、長家が他人の干渉をわずらわしく思い、亡き妻との思い出の世界に閉じこもってゆくという文脈につながっている。

⑥　和歌Ｙは、世の無常のことなど今は考えられないと詠んだ歌だが、そう詠んだことでかえってこの世の無常を意識してしまった長家が、いつかは妻への思いも薄れてゆくのではないかと恐れ、妻を深く追慕してゆく契機となっている。

第２講　共通テスト第２日程 第３問

第３問

次の文章は、『山路の露』の一節である。男君との恋愛関係のもつれに悩んで姿を消した女君は、やがて出家し、ある山里でひっそりと暮らしていた。女君の生存を伝え聞いた男君は、女君の弟（本文では「童」）を使いとして何度か手紙を送ったが、女君は取り合わなかった。本文は、あきらめきれない男君が女君の住む山里を訪ねる場面から始まる。これを読んで、後の問い（**問１～５**）に答えよ。なお、設問の都合で本文の下に行数を付してある。（配点　50）

夕霧たちこめて、道いとたどたどしけれども、深き心をしるべにて、急ぎわたり給(たま)ふも、(ア)かつはあやしく、今はそのかひあるまじきを、と思(おぼ)せども、ありし世の夢語りをだに語り合はせまほしう、行く先急がるる御心地になむ。浮雲はらふ四方(よも)の嵐に、月なごりなうすみのぼりて、千里(ちさと)(注1)の外(ほか)まで思ひやらるる心地するに、いとど思し残すことあらじかし。山深くなるままに、道いとしげう、露深ければ、御随身(ずいじん)いとやつしたれどさすがにつきづきしく、御前駆(さき)の露はらふ様もをかしく見ゆ。

メモ欄

かしこは、山のふもとに、いとささやかなる所なりけり。まづかの童(わらは)を入れて、案内(注2)み給へば、

「こなたの門だつ方は鎖(さ)して侍(はべ)るめり。竹の垣ほしわたしたる所に、通ふ道の侍るめり。ただ入らせ給へ。人影もし侍らず」

と聞こゆれば、

「しばし音なくてを」

とのたまひて、我ひとり入り給ふ。

小柴(こしば)といふもの(イ)<u>はかなくしなしたる</u>も、同じことなれど、いとなつかしく、よしある様なり。妻戸も開(あ)きて、いまだ人の起きたるにや、と見ゆれば、しげりたる前栽(せんざい)のもとよりつたひよりて、軒近き常磐木(ときはぎ)の所せくひろごりたる下にたち隠れて見給へば、こなたは仏の御前なるべし。名香(みやうがう)(注3)の香(か)、いとしみ深くかをり出でて、ただこの端つ方に行ふ人あるにや、経の巻き返さるる音もしのびやかになつかしく聞こえて、しめじめとものあはれなるに、なにとなく、やがて御涙すすむ心地して、つくづくと

メモ欄

見ゐ給へるに、とばかりありて、行ひはてぬるにや、

「いみじの月の光や」

とひとりごちて、簾(すだれ)のつま少し上げつつ、月の顔をつくづくとながめたるかたはらめ、昔ながらの面影ふと思し出でられて、いみじうあはれなるに、見給へば、月は残りなくさし入りたるに、鈍色(にびいろ)(注4)、香染(かうぞめ)などにや、袖口なつかしう見えて、額髪(ひたひがみ)のゆらゆらと削(そ)ぎかけられたるまみのわたり、いみじうなまめかしうをかしげにて、かかるしもこそらうたげさまさりて、忍びがたうまもりゐ給へるに、なほ、とばかりながめ入りて、

「里わかぬ雲居の月の影のみや見し世の秋にかはらざるらむ」

と、しのびやかにひとりごちて、涙ぐみたる様、いみじうあはれなるに、まめ人(注5)も、さのみはしづめ給はずやありけむ、

「ふるさとの月は涙にかきくれてその世ながらの影は見ざりき」

とて、ふと寄り給へるに、いとおぼえなく、化け物などいふらむものにこそと、むくつけくて、奥ざまに引き入り給ふ袖を引き寄せ給ふままに、せきとめがたき御気色(けしき)を、

メモ欄

さすが、それと見知られ給ふは、いと恥づかしう口惜しくおぼえつつ、ひたすらむくつけきものならばいかがはせむ、世にあるものとも聞かれ奉りぬるをこそは憂きことに思ひつつ、いかであらざりけりと聞きなほされ奉らむと、とざまかうざまにあらま[注6]されつるを、のがれがたく見あらはされ奉りぬると、せむかたなくて、涙のみ流れ出でつつ、我にもあらぬ様、いとあはれなり。

（注）
1　千里の外まで —— はるか遠くまで。
2　案内み給へば —— 様子をうかがわせてみると。
3　名香 —— 仏前でたく香。
4　鈍色、香染 —— どちらも出家者が身につける衣の色。
5　まめ人 —— きまじめな人。ここでは、男君を指す。
6　あらまされつる —— 願っていた。

メモ欄

問１　傍線部(ア)・(イ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［1］・［2］。

(ア)　かつはあやしく　［1］

①　一方では不思議で
②　一方では不愉快で
③　一方では不気味で
④　そのうえ不体裁で
⑤　そのうえ不都合で

(イ)　はかなくしなしたる　［2］

①　かわいらしく飾ってある
②　崩れそうな様子である
③　形ばかりしつらえてある
④　こぎれいに手入れしてある
⑤　いつのまにか枯れている

問２　二重傍線部「ありし世の夢語りをだに語り合はせまほしう、行く先急がるる御心地になむ」の語句や表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 3 。

① 「ありし世の夢語り」には、二人の仲は前世からの縁であるはずだと、男君が夢想していたことが表現されている。

② 「だに」は「まほしう」と呼応して、男君がわずかな望みにもすがりたいような心境であったことを表現している。

③ 「語り合はせ」の「せ」は使役の意味で、男君が女君自身の口から事情を説明させようとしていることを表現している。

④ 「急がるる」の「るる」は可能の意味で、女君のためなら暗い山道を行くこともいとわない男君の決意を表現している。

⑤ 「なむ」の後には「侍らめ」が省略されているが、それをあえて書かないことで余韻をもたせた表現になっている。

問３　この文章の男君の行動や心境についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［４］。

① 女君のもとへ行く途上、先導の者が露を払いながら進むのを見て、山道の雰囲気に合う優美な様子だと思っていた。

② 童に女君の住まいの様子を調べさせたが、その童が余計な口出しをするのを不快に思い、黙っているように命じた。

③ 女君の住まいの様子が、かつて二人で過ごした場所の雰囲気によく似ているのを見て、懐かしさを覚えた。

④ 木陰から垣間見たところ、仏道修行に励んでいる女君の姿を目にし、女君の敬虔（けいけん）さに改めて心ひかれた。

⑤ 独り歌を詠み涙ぐむ女君の、可憐（かれん）な姿を目にするうちに、隠れて見ているだけでは飽き足りなくなってしまった。

問４　この文章の女君の心境についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから**二つ**選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は［５］・［６］。

① 突然現れた男君を化け物だと思い込み、着物の袖をつかまれたことで、涙がこぼれるほど恐ろしく感じた。

② 目の前の相手が男君であることを知って動揺し、化け物であってくれたほうがまだあきらめがつくと思った。

③ 男君ほどつらい思いをしている者はこの世にいないだろうと世間が噂（うわさ）しているのを聞き、不愉快に感じていた。

④ 男君に見つかってしまったのは、歌を口ずさんだのを聞かれたせいに違いないと思い、軽率な行動を後悔した。

⑤ 男君に姿を見られてしまい、もはや逃げも隠れもできない状況になってしまったことを悟って、途方に暮れた。

⑥ 男君が以前とは打って変わってひどくやつれているのを見て、その苦悩の深さを知り、同情の気持ちがわいた。

問５　この文章では、「月」がたびたび描かれ、登場人物を照らし、和歌にも詠まれている。それぞれの場面についての説明として適当なものを、次の①〜⑥のうちから**二つ**選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 7 ・ 8 。

① ４行目「月なごりなうすみのぼりて」では、遠く離れた場所に住む女君のもとへといたる道のりを月が明るく照らし出すことで、夜の山道を行くことをためらっていた男君の心の迷いが払拭されたことが象徴的に表現されている。

② 22行目「月の顔をつくづくとながめたる」では、女君は月を見て男君の面影を重ねながら長々と物思いにふけっており、男君がいつかはこの山里まで訪ねてきてしまうのではないかと、女君が不安に思っていることが明示されている。

③ 22行目「月の顔をつくづくとながめたる」女君の横顔は、男君の目には昔と変わらないように見えたが、23行目「残りなくさし入りたるに」では、月の光が女君の尼姿を照らし出し、以前とは異なる魅力を男君に発見させている。

④ 21行目「いみじの月の光や」、27行目「里わかぬ雲居の月」と、女君が月を見て二度まで独りごとを言う場面では、仏道修行に専念する生活の中で、月だけが女君のつらい過去を忘れさせてくれる存在であったことが暗示されている。

⑤ 27行目「里わかぬ雲居の月」の歌における月は、世を捨てた者の暮らす山里までもあまねく照らすものとして詠まれており、昔と変わらないその光が、以前とは身の上が大きく変わってしまったことを、否応(いやおう)なく女君に意識させている。

⑥ 30行目「ふるさとの月」の歌は、27行目「里わかぬ雲居の月」の歌に答える形で詠まれたものだが、かつての女君の姿を月にたとえて出家を惜しんでいるところに、女君の苦悩を理解しない男君の、独りよがりな心が露呈している。

第３講　共通テスト第１日程 第４問

第４問　次の【問題文Ⅰ】の詩と【問題文Ⅱ】の文章は、いずれも馬車を操縦する「御術（ぎょじゅつ）」について書かれたものである。これらを読んで、後の問い（問１～６）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点　50）

【問題文Ⅰ】

吾ニ有リ二千里ノ馬一　毛（注1）骨何（1）蕭（せう）（注2）森タル

疾（はや）ク馳（は）スレバ如ク二奔風ノ一　白日無シレ留ムルレ陰ヲ

徐（おもむ）ロニ駆（か）クレバ当タリ二大道ニ一　歩（ほ）（注3）驟（しう）ハ中（あ）タル二五（注4）音ニ一

A 馬ニ雖モレ有リト二四足一　遅速ハ在リ二吾ガ X 一

六（りく）（注5）轡（ひ）ハ応ジ二吾ガ手ニ一　調和スルコト如シ二瑟（しつ）（注6）琴ノ一

東西ト与二南北一　高二‐下ス山ト与レ林ヲ

メモ欄

B

惟意所欲適

至(3)ルレ哉人ト与レ馬

伯(注8)楽ハ識二ルモ其ノ外ヲ一

王良ハ得二タリ其ノ性ヲ一

良馬ハ須二ツ(まツ)善(注9)馭(ぎよ)ヲ一

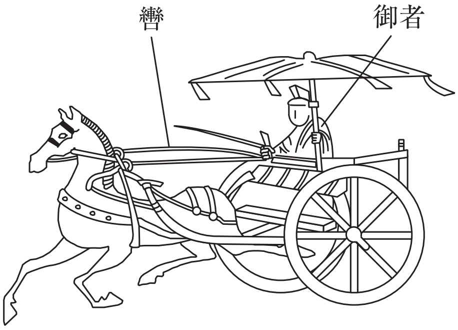
九(注7)州可二シ周(2)尋一ヌ

両楽不二相侵一サ

徒(ア)知二ル価ノ千金一ナルヲ

此ノ術固(イ)已ニ深シ

吾ガ言可レシ為レス箴(注10)(しん)ト



馬車を走らせる御者

メモ欄

（注）
1　毛骨――馬の毛なみと骨格。
2　蕭森――ひきしまって美しい。
3　歩驟――馬が駆ける音。
4　五音――中国の伝統的な音階。
5　六轡――馬車を操る手綱。
6　瑟琴――大きな琴と小さな琴。
7　九州――中国全土。
8　伯楽――良馬を見抜く名人。
9　善馭――すぐれた御者（前ページの図を参照）。馭は御に同じ。
10　箴――いましめ。

（欧陽脩（おうようしゅう）『欧陽文忠公集（おうようぶんちゅうこうしゅう）』による）

【問題文Ⅱ】

王良は趙（ちょう）国の襄主（じょうしゅ）に仕える臣であり、「御術」における師でもある。ある日、襄主が王良に馬車の駆け競（くら）べを挑み、三回競走して三回とも勝てなかった。くやしがる襄主が、まだ「御術」のすべてを教えていないのではないかと詰め寄ると、王良は次のように答えた。

凡（ソ）御之所（ハ）レ貴（ブ）、(a)馬体安（ンジ）二于車（ニ）一、(b)人心調（かなヒ）二于馬（ニ）一、而（ル）後（ニ）可（シ）二以（テ）(c)進（ムコト）速（すみヤカニシテ）致（ス）一レ遠（キヲ）。C今君

後則欲レ逮レ臣、先則恐レ逮二于臣一。夫レ誘(すす)メテレ道ニ争フハレ遠キヲ、非ザレバレ先ンズルニ則チ後ルル也。而シテ先‖(d)後ノ心ハ在リ二于臣ニ一。‖(e)尚ホ何ヲ以テ調ハン二於馬ニ一。此レ君之所二以後ルル一也。

（『韓非子(かんぴし)』による）

メモ欄

問１　波線部(ア)「徒」・(イ)「固」のここでの意味と、最も近い意味を持つ漢字はどれか。次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。
解答番号は［１］・［２］。

(ア)「徒」［１］

① 只
② 復
③ 当
④ 好
⑤ 猶

(イ)「固」［２］

① 強
② 難
③ 必
④ 絶
⑤ 本

問２　波線部(1)「何」・(2)「周」・(3)「至 哉」のここでの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 3 ～ 5 。

(1)「何」 3

① どこが
② いつから
③ どのように
④ どうして
⑤ なんと

(2)「周」 4

① 手あたり次第に
② 何度も繰り返して
③ あらゆるところに
④ きちんと準備して
⑤ はるか遠くより

(3)「至 哉」 5

① あのような遠くまで行くことができるものなのか
② こんなにも人の気持ちが理解できるものなのか
③ あのような高い山まで登ることができようか
④ このような境地にまで到達できるものなのか
⑤ こんなにも速く走ることができるだろうか

問３　**【問題文Ⅰ】**の傍線部Ａ「馬雖レ有二四足一遅速在二吾[X]一」は「御術」の要点を述べている。**【問題文Ⅰ】**と**【問題文Ⅱ】**を踏まえれば、**【問題文Ⅰ】**の空欄[X]には**【問題文Ⅱ】**の二重傍線部(a)～(e)のいずれかが入る。空欄[X]に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は[6]。

① (a) 体
② (b) 心
③ (c) 進
④ (d) 先
⑤ (e) 臣

問４　傍線部**Ｂ**「惟 意 所 欲 適」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 7 。

① 惟 意 所二欲 適一　　惟(た)だ意の欲して適(かな)ふ所にして

② 惟 意 所 欲レ適　　惟だ意(おも)ふ所に適(かな)はんと欲して

③ 惟 意レ所レ欲 適　　惟だ欲する所を意(おも)ひ適(ゆ)きて

④ 惟 意 所レ欲レ適　　惟だ意の適(ゆ)かんと欲する所にして

⑤ 惟 意レ所二欲 適一　　惟だ欲して適(ゆ)く所を意(おも)ひて

問５　傍線部Ｃ「今君後則欲㆑逮㆑臣、先則恐㆑逮㆓于臣㆒。」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **8** 。

① あなたは私に後ろにつかれると馬車の操縦に集中するのに、私が前に出るとすぐにやる気を失ってしまいました。

② あなたは今回後れても追いつこうとしましたが、以前は私に及ばないのではないかと不安にかられるだけでした。

③ あなたはいつも馬車のことを後回しにして、どの馬も私の馬より劣っているのではないかと憂えるばかりでした。

④ あなたは後から追い抜くことを考えていましたが、私は最初から追いつかれないように気をつけていました。

⑤ あなたは私に後れると追いつくことだけを考え、前に出るといつ追いつかれるかと心配ばかりしていました。

問６　【問題文Ⅰ】と【問題文Ⅱ】を踏まえた「御術」と御者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

① 「御術」においては、馬を手厚く養うだけでなく、よい馬車を選ぶことも大切である。王良のように車の手入れを入念にしなければ、馬を快適に走らせることのできる御者にはなれない。

② 「御術」においては、馬の心のうちをくみとり、馬車を遠くまで走らせることが大切である。王良のように馬の体調を考えながら鍛えなければ、千里の馬を育てる御者にはなれない。

③ 「御術」においては、すぐれた馬を選ぶだけでなく、馬と一体となって走ることも大切である。襄主のように他のことに気をとられていては、馬を自在に走らせる御者にはなれない。

④ 「御術」においては、馬を厳しく育て、巧みな駆け引きを会得することが大切である。王良のように常に勝負の場を意識しながら馬を育てなければ、競争に勝つことのできる御者にはなれない。

⑤ 「御術」においては、訓練場だけでなく、山と林を駆けまわって手綱さばきを磨くことも大切である。襄主のように型通りの練習をおこなうだけでは、素晴らしい御者にはなれない。

第３講　共通テスト第２日程 第４問

第４問

次の文章は、北宋(ほくそう)の文章家曾鞏(そうきよう)が東晋(とうしん)の書家王羲之(おうぎし)に関する故事を記したものである。これを読んで、後の問い（問１～７）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点　50）

羲之之書、(ア)晩乃善。則チ其ノ所ハレ能クスル、蓋シ亦タ以テ二精力ヲ一自ラ致ス者ニシテ、非ザル二天成ニ一也。然レドモ後世 X レ有二能ク及ブ者一、A豈其学不レ如レ彼邪。則チ学ハ固ヨリ(イ)豈可二以少一哉。B況ンヤ欲スル三深ク造(いた)ラント二道徳ニ一者ヲ邪。墨池之上(ほとり)ハ、今ハ為ル二州ノ(注1)学舎ト一。(注2)教授王君盛ハ、恐ルル二其ノ不ルヲレ章(あらは)レ也(や)、書シ二晋ノ王(注3)

メモ欄

右軍ノ墨池之六字ヲ於楹（えい）（注4）間（かん）ニ一以テ掲グレ之ヲ。
又タ告ゲテ二於鞏ニ（注5）一曰ハク、「願ハクハ有ランコトヲレ記。」ト C推スニ二王君之心ヲ一、
豈ニ愛シテ二人之善ヲ一、雖モ二一能ト一不シテ二以テ廃セ一、而因リテ
以テ及ブ二乎其ノ跡ニ一邪。其レ亦タ欲スル下推シテ二其ノ事ヲ一以テ
勉（はげ）マサント中其ノ学ブ者ヲ上邪。D夫人之有一能而使
後人尚之如此。況ンヤ仁（注6）人荘士之遺（注7）
風余思、被（かうむ）ル二於来世ニ一者如何ゾ哉。

（曾鞏「墨池記（ぼくちき）」による）

（注）
1　州学舎 —— 州に設置された学校。
2　教授王君盛 —— 教授の王盛（おうせい）のこと。
3　王右軍 —— 王羲之を指す。右軍は官職名。
4　楹 —— 家屋の正面の大きな柱。
5　鞏 —— 曾鞏の自称。
6　仁人荘士 —— 仁愛の徳を備えた人や行いの立派な者。
7　遺風余思 —— 後世に及ぶ感化。

メモ欄

問１　波線部(ア)「晩乃善」・(イ)「豈可㆓以少㆒哉」のここでの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［1］・［2］。

(ア)「晩乃善」［1］
① 年齢を重ねたので素晴らしい
② 年を取ってからこそが素晴らしい
③ 晩年になってさえも素晴らしい
④ 晩年のものはいずれも素晴らしい
⑤ 年齢にかかわらず素晴らしい

(イ)「豈可㆓以少㆒哉」［2］
① やはり鍛錬をおろそかにするにちがいない
② きっと稽古が足りないにちがいない
③ なんと才能に恵まれないことだろうか
④ どうして努力を怠ってよいだろうか
⑤ なぜ若いときから精進しないのか

問2　空欄 X に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 3 。

① 宜
② 将
③ 未
④ 当
⑤ 猶

問３　傍線部Ａ「豈 其 学 不レ 如レ 彼 邪」に用いられている句法の説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから**二つ**選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 4 ・ 5 。

① この文には比較の句法が用いられており、「～には及ばない」という意味を表している。
② この文には受身の句法が用いられており、「～されることはない」という意味を表している。
③ この文には限定の句法が用いられており、「～だけではない」という意味を表している。
④ この文には疑問を含んだ推量の句法が用いられており、「～ではないだろうか」という意味を表している。
⑤ この文には仮定を含んだ感嘆の句法が用いられており、「～なら～ないなあ」という意味を表している。
⑥ この文には使役を含んだ仮定の句法が用いられており、「～させたとしても～ではない」という意味を表している。

問４　傍線部Ｂ「況欲㆔深造㆓道徳㆒者邪。」とあるが、その解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［6］。

① ましてつきつめて道徳を理解しようとする者がいるのだろうか。
② まして道徳を体得できない者はなおさらであろう。
③ それでもやはり道徳を根付かせたい者がいるであろう。
④ ましてしっかりと道徳を身に付けたい者はなおさらであろう。
⑤ それでも道徳を普及させたい者はなおさらではないか。

問５　傍線部Ｃ「王 君 之 心」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 一握りの才能ある者を優遇することなく、より多くの人材を育ててゆこうとすること。
② 王羲之の墨池の跡が忘れられてしまうことを憂い、学生たちを奮起させようとすること。
③ 歴史ある学舎の跡が廃れていることを残念に思い、王羲之の例を引き合いに出して振興しようとすること。
④ 王羲之の天賦の才能をうらやみ、その書跡を模範として学生たちを導こうとすること。
⑤ 王羲之ゆかりの学舎が忘れられてしまったことを嘆き、その歴史を曾鞏に書いてもらおうとすること。

問６　傍線部**Ｄ**「夫人之有一能而使後人尚之如此」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **8** 。

① 夫人之有二一能一而使二後人一尚レ之レ如レ此
夫(か)の人の一能有りて後人を使ひて此(か)くのごとく之を尚(たつと)ぶ

② 夫人之有二一能一而使二後人尚一レ之レ如レ此
夫の人を之れ一能有れば而(すなは)ち後人をして此くのごときに之(ゆ)くを尚ばしむ

③ 夫人之有二一能一而使二後人尚一レ之如レ此
夫(そ)れ人の一能有りて後人をして之を尚ばしむること此くのごとし

④ 夫人之有下一能而使二後人尚一レ之如上レ此
夫れ人を之れ一能にして後人をして之を尚ばしむること此くのごとき有り

⑤ 夫人之有下一能而使二後人一尚レ之如上レ此
夫れ人の一能にして後人を使ひて尚ぶこと此くのごとき有り

問７　「墨池」の故事は、王羲之が後漢の書家張芝(ちょうし)について述べた次の**【資料】**にも見える。本文および**【資料】**の内容に**合致しないもの**を、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

> **【資料】**
>
> 云、「張芝臨池学書、池水尽黒。使人耽之若是、未必後之也。」
>
> （『晋書(しんじょ)』「王羲之伝(おうぎしでん)」による）

① 王羲之は張芝を見習って池が墨で真っ黒になるまで稽古を重ねたが、張芝には到底肩をならべることができないと考えていた。

② 王盛は王羲之が張芝に匹敵するほど書に熱中したことを墨池の故事として学生に示し、修練の大切さを伝えようとした。

③ 曾鞏は王羲之には天成の才能があったのではなく、張芝のような並外れた練習によって後に書家として大成したと考えていた。

④ 王羲之は張芝が書を練習して池が墨で真っ黒になったのを知って、自分もそれ以上の修練をして張芝に追いつきたいと思った。

⑤ 王盛は張芝を目標として励んだ王羲之をたたえる六字を柱の間に掲げ、曾鞏にその由来を文章に書いてくれるよう依頼した。

■ 共通テスト第１日程

問題番号(配点)	設　問	解答番号	正　解	配　点
第３問 (50)	1	1	4	5
		2	3	5
		3	1	5
	2	4	1	7
	3	5	1	6
	4	6	5	6
	5	7 − 8	3 − 6	16(各8)

(注)
ー(ハイフン)でつながれた正解は，順序を問わない。

第１講　共通テスト第１日程 第３問　解答

■ 共通テスト第２日程

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第３問（50）	1	1	1	5
		2	3	5
	2	3	2	6
	3	4	5	6
	4	5 － 6	2 － 5	14(各7)
	5	7 － 8	3 － 5	14(各7)

（注）
－（ハイフン）でつながれた正解は，順序を問わない。

■ 共通テスト第１日程

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第４問（50）	1	1	1	4
		2	5	4
	2	3	5	5
		4	3	5
		5	4	5
	3	6	2	6
	4	7	4	6
	5	8	5	6
	6	9	3	9

■ 共通テスト第２日程

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第４問（50）	1	1	2	5
		2	4	5
	2	3	3	4
	3	4 － 5	1 － 4	8(各4)
	4	6	4	7
	5	7	2	6
	6	8	3	7
	7	9	1	8

（注）
－（ハイフン）でつながれた正解は，順序を問わない。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。